コミュニケーションのバリアフリーで、より良い社会に

福島県聴覚障害者情報支援センター所長としてだけでなく、東北、そして日本全体を見据え、きこえない・きこえにくい人たちがより良く暮らせる社会の実現に尽力されている山田さん。持ち前の負けん気と前向きな姿勢で、周囲に元気を届ける存在です。

今回はそんな山田さんに、日本で初めて開催される東京 2025 デフリンピックへの思いや、大会を盛り上げようと奮闘する日々について、お話を伺いました。

【プロフィール】

山田　尚人（やまだ　なおと）

1981 年	福島市生まれ
2003 年	東北文化学園大学卒業
2005 年	Azusa Pacific University 修了
2006 年～2022 年	福島県職員
2014 年～	（一社）福島県聴覚障害者協会理事
2021 年～	東北ろうあ連盟事務局長
2022 年～	（一財）全日本ろうあ連盟理事
2022 年～	（一財）全日本ろうあ連盟スポーツ委員会事務局長
2023 年～	福島県聴覚障害者情報支援センター所長

―山田さんの小学生・中学生時代についてお聞かせください。

小学２年生までは、聾学校と地域の小学校の両方に通っていました。月曜と金曜は聾学校、火曜から木曜は地域の小学校に通うというような生活でした。

小学３年生からは地域の小学校に転校し、そこに通うようになりました。

一番大変だったのは、やはりコミュニケーションです。手話を初めて教えてもらったのは、小学３年生のときで、地域の小学校へ転校した際に、同級生が挨拶と名前を手話で伝えてくれたことがきっかけでした。

小学４年生のときには水泳部に入りました。水の中では音が関係ないので、きこえる人たちと対等に勝負ができると思っていたんです。ただ、当時はスタートランプがなかったので、今振り返ると本当の意味で対等ではなかったのかもしれません。それでも、水の中で泳ぐことは本当に楽しかったと記憶しています。

中学に入学したとき、水泳部に入ろうと思っていたのですが、ちょ

うどプールが工事中で使えず、別の部活に入ることになりました。どの部活にしようか迷っていたとき、担任の先生から「危ないから、野球部はやめた方がいいと思うよ」と言われました。

先生は、きこえない私のことを心配して言ってくれたのだと思います。でも、そのときはその言葉に反発して、野球に興味も経験もなかったのに、勢いで「野球部に入ります」と宣言してしまいました。

すると先生は、一生懸命、教頭先生や野球部の顧問の先生に掛け合ってくれて、無事に入部できることになりました。先生のその姿を見て、少し申し訳ない気持ちになったのを覚えています。

そして、野球部に入部はしたものの、まずボールの投げ方すら分からなくて（笑）。それでも、うまくできないなりに、部活の仲間たちとは楽しく過ごすことができました。

―山田さんはいつも前向きな発言をされてますが、何か大切にされているモットーや心がけていることがあるのでしょうか。

子どもの頃、「声が変だね」「きこえないの？」と、周囲から心ない言葉をかけられたことがありました。

そうした経験から、「負けてはいけない」という反骨心が芽生え、いつしか「きこえる人には絶対に負けたくない」という気持ちが、自分を動かす原動力になっていたように思います。

自分ではネガティブな思考だと思うこともありますが、その気持ちが、結果的に前向きだと受け取ってもらえるのなら、それはとても嬉しいことです。

共生社会の実現のためにも、きこえる人ときこえない人が対等にコミュニケーションを取れる社会が、私の理想です。

―山田さんから、小さい頃はきこえない人の中でもデフリンピックの存在があまり知られていなかったと伺いました。ご自身の幼少期のスポーツにまつわるご経験と、今のデフスポーツを取り巻く状況についてお聞かせください。

小学生のときは、部活動だけでなく、地域の水泳クラブにも通っていて、平泳ぎではいつもクラスで１位でした。

小学６年生のときには、福島市内の全ての小学校が参加する水泳大会の平泳ぎで４位に入賞しました。あのとき、もしスタートランプがあったら３位に入れていたかもしれません（笑)。というのも、３位との差が本当にわずかで、今でも「あのときスタートランプがあれば…」と思うことがあります（再び笑)。

地域のスイミングスクールからは「選手コース」に入らないかと声をかけていただきましたが、選手コースは平日に毎日練習があり、当時は授業の理解が追いついておらず、勉強に集中したかったため、お断りしました。

というのも、当時の学校の授業は、先生が板書した内容をノートに写すだけで、内容をきちんと理解することができなかったからです。

今では、きこえない生徒も合理的配慮のおかげで、学校の中で情報保障（※1）を受けられるようになり、理解してくれる人も増えてきました。学校が終わったあとにスポーツができる環境も整ってきていて、とても嬉しく思います。

（※１）情報保障
障がいがあっても不利なく情報にアクセスできること。

―山田さんはアメリカの Azusa Pacific University に留学されていましたが、現地での手話やコミュニケーションに戸惑われることはありましたか？

いえいえ、アメリカの方が情報保障が行き届いていて、快適に過ごせました。全ての講義で、要約筆記（※2）や手話通訳などの情報保障が受けられたのです。

日本の大学に入学した当初、きこえない大学生や高校生が集まり、

「情報保障を考える検討会議」に参加する機会がありました。そこでは、同じように情報へのアクセスに悩む仲間と出会い、授業中や学校生活での情報保障の必要性や、どのような支援が求められているのかを改めて実感しました。

また、大学４年生のとき、１年生のきこえない学生と一緒に、要約筆記を通して情報を共有する「ノートテイクサークル」を立ち上げました。授業の内容をリアルタイムで要約して提供できる仕組みを整え、少しでも安心して学べる環境をつくろうと取り組みました。

先輩として、自分の経験を活かしながら、後輩たちが困らないようにという思いで活動していました。

そして、大学の卒業式の日には、初めて手話通訳を付けてもらうことができました。式典という特別な場で、自分の目で見て理解できる言葉があることに深く感動しました。これまで「ないのが当たり前」だった状況が少しずつ変わり始めていることを実感し、これからも情報保障の重要性を伝えていきたいという思いが強まりました。

日本の学校では、手話通訳や要約筆記による情報保障がありませんでした（当時)。アメリカは、ADA 法（障害を持つアメリカ人法（Americans with Disabilities Act)）に基づいて、学校生活にも手話通訳をつけてもらうという経験をしました。

アメリカの大学で手話通訳のコーディネーターと出会ったとき、私は英語力も乏しく、アメリカ手話（※3）も全く分からない状態でした。

そこで、アメリカ手話の講義を受講し、３か月間学びました。また、手話以外の講義では、パソコンによる要約筆記で授業を受けるようになりました。

アメリカ手話も難しかったですが、それ以上に大変だったのは英語そのものでした。そんな中、ゼミの先生がユニバーサルデザインを専門としており、「ユニバーサルデザインについて学んでみてはどうか」と勧めてくれました。

アメリカでの生活は、最初のうちはなかなか慣れず、やつれていました（笑)。でも、次第に環境にも慣れ、生活が楽しくなってくると、ハンバーガーやピザ、ドーナツばかりを食べ、移動はほとんど車。まったく歩かない生活をしていたせいで、日本に帰る頃には 10kg も太って別人になっていました（汗)。

また、ホームステイ先の子どもたちとバスケットボールやサッカーで遊んだり、メジャーリーグの試合を観に行ってイチロー選手のプレーを間近で見たりと、大学の授業以外の時間もとても充実していました。

（※２）要約筆記
　きこえない・きこえにくい人が話の内容を理解できるように、話された言葉をその場で要点をまとめて文字にして伝える方法。主に、会議、講演会、授業、病院での説明など、様々な場面で活用されている。

（※３）アメリカ手話
　アメリカ手話は、主にアメリカ国内で使われている手話です。日本では、日本手話が広く使われています。このように、話し言葉と同じように手話にも国ごと

に異なる言語が存在します。
　そのため、国際会議や国際的なイベントの場では、手話の世界共通語として作られた「国際手話」が用いられます。デフリンピックでも、参加者が円滑にコミュニケーションを取れるよう、「国際手話」が使われています。

イベント本番前に最終チェックを行う山田さん

―山田さんは以前、私たちと同じく福島県職員として働いていらっしゃいましたが、福島県聴覚障害者情報支援センターでの仕事に専念しようと思われたのは、どのようなきっかけからだったのでしょうか？

　福島県職員になったきっかけは、大学生のとき仙台市の地下鉄を作るプロジェクトに参加した際、ユニバーサルデザインに関する計画を作っていることを知りました。
　このとき、「行政で働けば、人にやさしい街づくりの仕事ができる！」という目標ができ、福島県職員採用試験を受けました。
　福島県職員としては、17 年間にわたり、４つの職場で勤務しました。そのときに得た経験や、お世話になった方々とのつながりは、今の仕事にも大きく生かされており、自分にとっての大きな財産です。

福島県聴覚障害者支援センターの職員となったきっかけは、福島県内のきこえない・きこえにくい方々の権利向上や共生社会の推進に取り組みたいと思ったからです。

東京都内でデフリンピックの PR を行う山田さん

―山田さんは現在、福島県聴覚障害者情報支援センターの所長を務めておられ、全日本ろうあ連盟や東北ろうあ連盟でも要職に就いていらっしゃいますが、それぞれの立場では、どのようなお仕事に取り組んでおられるのでしょうか？

福島県聴覚障害者情報支援センターでは、デフリンピックではどういう情報が必要か、理事会などで意見を吸い上げて調整を進めています。

また、福島県聴覚障害者協会の副会長として、青年部や老壮年部など各専門部の支援や、県内のきこえない人の権利を守る活動にも取り組んでいます。

東北ろうあ連盟では、事務局として東北６県の聴覚障害者協会を巡回しながら、デフリンピックのＰＲ活動を行っています。

また、全日本ろうあ連盟が実施している全国キャラバン「東京 2025 デフリンピック PR カー」についても、東北６県での巡回日程を調整しました。

全日本ろうあ連盟では、理事に就任して４年目になります。秋田県出身で常任理事の久松三二（ひさまつみつじ）さんから「同じ東北出身として一緒にがんばろう」とお声がけをいただいたことがきっかけで、理事に就任しました。

その後、スポーツ委員会事務局長にも任命され、１年後にデフリンピックの開催が決定しました。事務局長に就任した当初は不安もありましたが、福島県でサッカー競技が開催されることになり、スポーツ委員会事務局長としてデフリンピックに携われることを大変嬉しく思っています。

―様々な組織で多岐にわたるお仕事に携わり、お忙しい日々を送っ

ていらっしゃることと思いますが、現在、特に力を入れて取り組んでいらっしゃることは何でしょうか？

デフリンピックに関する取り組みはもちろんですが、私が特に力を入れているのは、きこえない子どもたちが将来やりたいことを自由に選び、実現できるような環境づくりです。

デフリンピックの開催をきっかけに、福島県では小中学生を対象とした手話講座や、サッカー競技への観戦招待が実施されており、こうした取り組みに携われることをとても嬉しく思っています。

また、きこえない高齢者に対する支援は少しずつ進んでいますが、きこえない子どもたちや、その保護者への支援はまだ十分とは言えません。だからこそ、これからはその分野にも力を入れていきたいと考えています。

―「東京 2025 デフリンピック」は、初回大会から 100 周年を迎えるとともに、日本で初めて開催される記念すべき大会となります。さらに、サッカー競技が福島県で行われることになりましたが、大会や福島開催への思いについて、ぜひお聞かせください。

日本で初めてデフリンピックが開催されることを、大変嬉しく思います。そして、自分が生まれ育った福島県でサッカー競技が行われることは、本当に誇らしいです。

J ヴィレッジは、2011 年の東日本大震災の後、原発事故の収束拠点となり、「もうここではサッカーはできないのでは」と思った時期もありました。それがサッカーの会場としてデフリンピックという国際大会の舞台になることは、本当にすごいことだと思っています。

また、県内の子どもたちが試合を観戦し、きこえる子どもたちも、きこえない子どもたちも、一緒に応援を楽しんでくれたら、とても嬉しいです。

―山田さんご自身も、何かスポーツをされているのでしょうか。また、リフレッシュ方法や趣味があれば、ぜひ教えてください。

今でも休日には屋内プールに泳ぎに行っています。今はもっぱら、四十肩対策が目的です（笑）。

気の合う仲間と美味しい食事もリフレッシュ方法のひとつです

―デフリンピックに出場する選手へエールをお願いします。

日本で初めて開催されるデフリンピックに出場される選手の皆さんは、これまでの努力を信じて、自分の持っている力を発揮してほしいです。皆さんの活躍が、多くの人に勇気や感動を届けてくれると信じています。全力で応援しています！

―最後に、デフリンピックの開催をきっかけに、デフスポーツやろう者文化への関心が高まっていると感じておりますが、きこえない・きこえにくい方々にとって、どのような社会を目指していきたいとお考えでしょうか。

デフリンピックの開催が決まった大きな理由の一つは、「コミュニケーションのバリアフリー」、つまり情報アクセシビリティの重要性が認識されたことだと思っています。
デフリンピックをきっかけに、きこえる人も、きこえない人も、学校や職場、そしてスポーツの場でも、コミュニケーションのバリアフリー、コミュニケーションの壁がなくなり、対等に関われる社会が広がっていってほしいと願っています。

私自身、県職員として働いていたとき、周囲が話している内容がほとんど理解できず、情報の差を痛感しました。ひと月分の情報が、体感では３日分しか得られないという状況でした。一方で、聴覚障害者協会の中では、手話がわからない人が逆に苦労する場面もあります。

きこえる人ときこえない人が、互いに歩み寄り、教え合いながらコミュニケーションを深めていくことができれば、誰もが暮らしやすい、より良い社会になるのではないかと思っています。

福島県庁に掲示されているデフリンピックの横断幕をバックに、
デフリンピックの手話ポーズでパチリ！